

倉田 稔名誉教授記念号の発刊に寄せて

学長 秋 山 義 昭

このたび、人文研究 115 輯を発刊するにあたり、長年本学の発展に尽くされた小樽商科大学名誉教授倉田稔先生のご功績を讃え、本号を「倉田稔名誉教授記念号」とすることに致しました。

倉田稔先生は、1964 年に慶應義塾大学経済学部を卒業後、同大学大学院経済学研究科博士課程に進学、1969 年に同課程を修了されました。1981 年に、慶應義塾大学より経済学博士号が授与されております。日本社会事業大学助手、専任講師、助教授として勤務された後、1974 年に本学に助教授として着任され、1981 年に教授になりました。

先生の専門分野は、経済学史研究で、なかでも、オーストリアのマルクス経済学者で大蔵大臣でもあったルドルフ・ヒルファディング研究に取り組みました。1975 年に刊行された先生の『金融資本論の成立』（青木書店）は、ヒルファディング本人に焦点を当てつつ、徹底した文献研究を試みた初めての著作です。また、1984 年に発表された『若きヒルファディング』（丘書房）は、ヒルファディングの 1877 年から 1917 年までを取り扱った世界でも数少ない本格的伝記で、内外から大きな注目を浴びました。

先生は、本学に着任以来、社会思想史の講義を担当され、熱心に学生の教育にあたられた一方、各種委員会や学内の運営にも数多く携わっていただき、1996 年から 4 年間は、本学の附属図書館長を勤められました。先生の温厚かつ誠実なお人柄と学問に傾けるほとぼしるような情熱、「倉田節」とも言える

軽妙闊達な話しぶりに惹かれた学生や市民の方々は少なくありません。

2005年3月で、先生はいったん本学の定年年齢を迎えられたのですが、研究と教育のみに専念していただく特任教授としてその後2年間本学に勤務され、2007年3月をもって退職されました。

先生の関心領域は、その後も止まるところを知らず、ヨーロッパ、特にハプスブルグ家の歴史から文化論、日本の作家・文化人論に至るまで実に幅広く、その精力的な情熱と執筆活動には驚くべきものがあります。これらの業績は、夥しい数の論文や著作として公刊され、この分野の第一人者として常に学界をリードしてこられました。

長い本学での研究生生活の後半に多くの時間と労力を注がれたのは、小林多喜二研究でありましょう。その渾身の成果は、2003年の『小林多喜二伝』（論創社）に余すところなく示されております。

この書は、多喜二の故郷とも言うべき小樽の地で母校の教員によって書かれたものであり、また「作品論」ではなく、新たな取材に基づく「作家研究」に徹した「日本で最も詳しい多喜二伝記」であることで、新たな研究の出発点ともなるべき秀作との高い評価を得ています。

倉田先生の以上のようなご活躍に対し、本学教育研究評議会は、教育上、学術上、功績が特に顕著であって、本学発展のために多大のご貢献をいただいたものと認め、小樽商科大学名誉教授の称号を授与することといたしました。

定年退職後も、先生は、引き続き小樽に留まり、自身が設立された「小樽社会史国際研究所」を中心にエネルギーに研究活動を続けられ、さらにまた新たなテーマを模索しておられます。これからも、先生の深い学識に支えられた学問へのこだわりにご期待申し上げ、記念号発刊のご挨拶といたします。